

西周と『日本哲学史』
加藤恒男

西周の功績として、①philosophyの紹介・導入、②同訳語の哲学、③『軍人勅諭』の起草があげられるが、戦前は主として③が主要とされた。今日では逆に、①②であろう。西の経歴では、哲学に集中したのは、オランダ留学前から徳川慶喜が京を去るころで、その後は徳川家の沼津兵学校頭取を経て、明治政府の兵部省出仕の後、軍政整備等に貢献した。主要な哲学説の紹介や自説の展開に没頭したとは思われない。上記のような哲学研究をどれほど自覚していたかわからないが、軍政整備に力を発揮したことは確かである。『徴兵令』は特筆されるが、軍人勅諭はそれ以上であろう。それは単なる軍隊規律の強化というにとどまらない、広い目的をはらんだ、きわめて政治色の濃いものであったのである。「竹橋事件」のような反乱を二度と起こさせない、絶対服従の国民国家をめざす、国民的な修養の核心を作り上げようとしたと言いうるもの、しがって、その後明治国家体制が絶対主義的な天皇制国家として完成（帝国憲法、教育勅語）を見るにいたる確固たる基盤となったのである。